二〇一三年九月二七日

枯蟷螂合掌のごと身じろがず　ともえ
ガイドらは天平衣装古都の秋　こすもす
石塊と見たるは仏草紅葉　宏虎

二〇一三年九月二六日

部屋めぐり直哉旧居の秋惜しむ　満天
力石ひびに触れもす愁思かな　なつき
奈良なれや鹿優先で走るバス　つくし
崩れ簗千切れし旗の傾きぬ　ともえ
曼珠沙華枯山水の一隅に　ぽんこ
天高し杉の美林の直線美　はく子

二〇一三年九月二五日

一塚を要としたる豊の秋　せいじ
飛火野の樹下に寄り添ふ親子鹿　つくし
古都の秋若草山に一望す　菜々

二〇一三年九月二四日

旅立ちの鞄に庭の青みかん　ともえ
夫はただ待っているだけ栗をむく　なつき
かなかなの鳴くに目覚めし峡の宿　きづな
逃げ足は疾風のごとし稲雀　有香
宵闇の野小屋に点る秋灯　雅流
夏休み果ててキャンパス姦しき　せいじ

二〇一三年九月二三日

もう括る他なし萩の乱れやう　うつぎ
俎に銀一文字初秋刀魚　よし子
わが背より高きに靡く芒原　さつき
カリオンの音谺して秋澄める　満天

二〇一三年九月二二日

農協の帽子被りて案山子立つ　さつき
堂縁に思ひ思ひや秋の人　さつき
秋の雲亡き愛犬にふと似たり　三刀
定置網一湾覆ふ良夜かな　ともえ

二〇一三年九月二一日

名水で入るるコーヒー秋うらら　さつき
崩れ伏し歩道を塞ぐしだれ萩　あさこ
穂薄の生ける高さを迷ひけり　よし子
門鎖しに出でて立待月仰ぐ　菜々
抱き起こしては倒伏の稲を刈る　なつき
あそんでと吾をとりまく赤とんぼ　うつぎ

毎日句会みのる選・二〇一三年九月三〇日